

## 第十二章 京都 — 常盤

郷子が鎌倉に滞在していた時には、義経が頼朝の許可を受けずに、検非違使に任官したため、頼朝が激怒していると聞かされていたが、都に居る義経はそれをほとんど苦にしていない。

郷子は、公文所の別当大江広元から、頼朝が将士の恩賞のすべてを決定することが、朝廷から鎌倉政権を独立させ、武士集団の統一と一体化を図るためにいかに大切なことなのかの説明を受けていただけに、義経がこの命令違反の重要性を認識していないで太平楽を決め込んでいるのが心配でならない。

だが、郷子が、義経の置かれた現状を知るにつれ、それも無理からぬことかもしれないと思うようになった。

まず、義経は頼朝が怒っているとの風聞を耳にただけで、直接に頼朝から叱責されたわけではない。もともと、義経の心には頼朝は血を分けた兄という甘えがあるから、頼朝の怒りを深刻にとらえていない。

それに、頼朝から検非違使の官職を放棄しろという命令もきていない。むしろ、頼朝からは、範頼に平家の追討を命じたので、義経は引き続き都の警護にあたれという指令が届いているくらいである。

義経にとっていまの検非違使の官職は、頼朝の旗揚げに参加する前の奥州藤原氏の食客のような境遇に比べれば、破格の大出世である。その上、鴨越の奇襲で平家を打ち破った英雄で後白河法皇の覚えもめでたく都での義経の人気はいまやとどまるどころを知らない状態にある。義経が都大路を通るとすぐに人が集まって身動きできないような騒ぎとなる。検非違使は、都の裁判権と警察権を全て握っている。だから、盗賊はもちろんのこと、貴族も武家も商家などの一般庶民も全て検非違使の前では恐れ入ってしまう。都には義経がやる事に表立って不満を述べたり直接諫めたりする人物が誰一人居ないのである。

若干二十五歳の遊び盛りの青年である義経は、いまの境遇に有頂天で、鎌倉の懸念などは頭の片隅にも留まらなかったのは無理からぬことであった。

義経は、賑やかなことが好きだから、ほとんど毎晩と言っていいほど宴会を開いている。いままで平家が管理していた所領からの収入もあり、いくら派手な宴会を開いても財政的には困らない。そんな豪華な宴会で義経はいつも数人の女房に取り囲まれている。彼女らは、郷子が居ても、静が同席していても全く意に介さない。初めは、料亭から来ている仲居や白拍子だと思っていたが、どうやら、貴族の娘なども混じっているらしい。検非違使と何らかの繋がりを持つ事は、将来役立つこともあろうかと、親も許しているのだろう。郷子は、こんな宴席に出たくないのだが、義経が出るというので仕方なく出ている。どうやら、出来るだけ多くの女性に囲まれていたいのと自分の見えないところに郷子が居るのは気になるらしい。

静は無論出席している。郷子が、それとなく見ていると、静も取り巻きの女房たちと一緒に楽んでいるというか、彼女達を仕切っているようだ。話題が豊富でみんなを笑わせ、すこし座が単調になってくると今様を唄ったりして再び座を盛り上げている。

郷子が、所在なさげにしていると、郷子の傍に来て話し相手になったりもする。

義経が、取り巻きの女房とたまに同衾しているかどうかはよく判らないが、ただ、見ている限りはいろいろな女性に取り巻かれてちやほやされていることが好きでそれで満足しているようにもみえるが、しかし実際のところは良く判らない。静は、あまり気にしていないようだ。愛情の問題と男の生理の問題を区別して考える事ができるらしい。

義経は自分が楽しむだけでなく、故郷を離れて都に来ている部下を楽しませようと意図していることは明らかだった。

部下の人数を三組ぐらいに分けて順繰りに宴会に参加させているようだ。

部下のために遊女達も毎回沢山呼んでいる。

時々、部下の間を回って声をかけ、酒を酌み交わしたりしている。

興に乗ると自分で横笛を吹いたりもする。

ただ、義仲が失敗した教訓から学んで、酒席の節度はかろうじて保たれており乱痴気騒ぎになるようなことはない。

郷子は、義経の心が分るような気がした。

(義経さまには、子飼いの部下が僅かにいる程度で、あとは、部下と言っても全て頼朝が派遣した侍だから、このような宴会をする形で彼らを手なづけようとしているのに違いない)

ある時、志乃が静御前が日本一の白拍子と言われている所以をどこからか聞いてきて教えてくれた。

「二年前、畿内で百日あまりの日照りが続いた養和の飢饉の時ですが、後白河法皇の御幸を仰ぎ、まず、百人の僧侶が読経をして雨乞いの祈願をしたそうですが効果がなく、その後九十九人の白拍子が順番に雨乞いの舞をまっただけですが、それでも雨は降らなかったのだそうです。そして最後に百人目の静御前が舞い出すと、一天にわかには掻き曇り突然雨が降り出して、三日間も降ったのだとか。それで、静御前は、法皇から日本一の白拍子の宣旨を受けたのだそうです」

あまりに良く出来た話なので真偽のほどはわからないが、それでもこんな評判が立つということは、静御前の舞が見事なうえに神がかり的な要素があるからだろう。しかも、法皇が宣旨でそれに日本一のお墨付きを与えているのだ。

(私など酒席ではとても静御前に敵わないわ)と郷子は思う。

郷子は、三善康信の言葉を思い出した。

「義経殿が、白拍子などと遊んでいる間は、何も心配していません。正室は、側室や妾や愛人や遊女とは全く違う立場にいるということです」

(酒席や娯楽は静御前に任せて、わたしは自分の正室としての役割を果たそう)

郷子は、そう思い立つと、義経に訊いてみた。

「義母である常盤御前に、ご挨拶に伺いたいのですが、お許しをいただけないでしょうか」  
義経は、郷子を見ながら穏やかに言った。

「お前は、母のことについてどのくらい知っている？」

「噂程度には。いまは、再婚されて大蔵郷一条長成さまの妻となり、一条のお屋敷におられると聞いております」

「入浴してからもうかれこれ半年以上にもなるが、その間母に会うか会うまいかずっと悩んでいた。しかし、子供の頃住んでいた一条の屋敷は、敷居が高くてどうしても足が向かないのだ」

義経は、そう言うと、母について語り始めた。

「平治の乱で、父義朝が清盛に敗れて死んだ時には、俺はまだ二歳だった。

今若乙若という二人の兄がいたことはおぼろげに覚えているが、二人は母が捕まって直ぐに、仏門に出されてしまったので、記憶に残っている事はほとんどない。

母と俺は、清盛が用意した七条朱雀の家で、二人で二年ほど一緒に暮らした。

家の外には、見張り役兼護衛の侍がいたが、家の中に居る時は、下婢を除けば、いつも二人だったから、三、四歳の頃には書の手習いをしながら、文字を教えてくれた。

母は、何事もいやとはいえない性格で、時々夜になると脂ぎった肥えた男が従者をつれて、家に忍んで来た。その男が家に来る日は、いつも母が、夕方になると顔色が青くなって気分が悪そうにしているのを見て、良く分った。俺が母に、あの男に『家に来るな』と言ってやると言うと、それこそ恐い顔をして、俺を睨みつけた。『絶対にあの男と目を合わせてはいけない。ましては、睨むなどもってのほかだ。あの男は悪魔だからそんなことをしたら直ぐに二人とも四条河原で晒し首にされてしまう』と言ってきつく叱られた。いつも穏やかな性格の母が俺を叩こうとして、拳を振り上げるのを見て、俺も恐くなった。その男が来る日に母は、俺を奥の部屋に閉じ込めて一步も外に出ないよう命じたが、俺も母が晒し首にされたら大変だと思うから部屋から外に出なかった。

遠からず、母のおなかが大きくなるとその男も来なくなった。母は、姫を生んだが、すぐに貰われていった。母が、産後の弱った身体を褥に横たえてひっそりとすすり泣くのを見ていて、いつかあの男に母に代わって復讐してやると心に誓ったものだ。

母は、その後すぐに一条長成と再婚した。あの男の差配らしい。恐らく、母がいくら表面を繕っても、心の奥底では嫌っている事を肌で感じ取ったに違いない。母は、いやといえない性格だから、何事にも黙ってあの男のいうなりになったのだろう。それと俺を一条の屋敷と一緒に引き取ってくれるというので安心したのかもしれない。一条長成は、凡庸な男で、仕事を無難にこなし、家で庭いじりでもしながら、毎日を平々凡々と大過なくすごせれば、それが最も幸せな人生と考えるような人物だ。それが、源氏と平家の棟梁の寵愛を受けた、天下の美女である母を迎えるというので、仰天して青くなったり赤くなったりしていたらしい。しかし、母の性格からすると、この人物が一番性にあったのではないか

と思う。

母はおっとりした性格で、何事もゆっくりとした動作で家事をこなした。母は、その美貌だけが評判になっているが、千人の中から選ばれたのは、それだけが理由ではない。動作はゆっくりだが存外几帳面なたちで、家の中はいつもきちんと整理されていたよ。

和歌もよく知っていたし、書も上手かった。琴も弾いたし、横笛も吹いた。

いま、横笛が吹けるのは、母からその当時習ったおかげなのさ。

再婚後の母は、毎日を穏やかに暮らし、顔も柔和になった。また、すぐに母のおなかが大きくなった。そして、弟が生まれた。継父も母も、すぐにこの弟の育児に夢中になり、俺は、一人でほって置かれるようになった。俺には、この家の雰囲気や平凡な暮らしには、飽き飽きしていた。

昼間でも眠っているようなこの家の空気にどっぷり浸かっていたら自分が腐ってしまいそうだった。俺は、表向き一条長成の子として育てられていたのだから、自分が義朝の子だとは知らなかった。しかし、俺の中の武士の血が自然に騒ぐのだ。それと、あの男への復讐心が強く、その感情を抑えきれなかった。だから家の外に出て棒切れを振り回して乱暴するようになった。恐らくその当時は手が付けられないくらい荒れていたのだと思う。

長成は、このことが平家の耳に入ったらどうなることかと心配したのだろう。

もともと、俺が物心ついたら、すぐに僧にするようにあの男から厳命されていた。だから、俺が七歳になると、鞍馬寺の別当である東光坊の阿闍梨蓮忍に預ける事にしたのだ。

母は、俺が連れて行かれるとき、俺を抱きしめて何も言わずに泣いていた。

恐らく、俺が、母を恨むかもしれないと思ったのだろう。

だが、俺は、屋敷を出るのがいやではなかった。あのまま、あの屋敷に居たら永久にあの男に復讐ができないと思っていたからだ。それで俺は母に言った。

『目的を果たすまでは二度と母上にお会いいたしません』

母は、それを聞くと、俺をさらに一層強く抱きしめて泣いた。

あの時の母の柔らかな肌と乳飲み子に授乳した後の母乳の匂いをいまだに忘れることができない。

しかし、残念ながら俺が復讐を果たす前に、あの男は、三年前に熱病で身体を焼かれて死んでしまった。

検非違使に任官した直後に母に会おうかどうかと迷っていたが、あの継父は、大蔵郷として平家とも長い付き合いがあったので、今の俺が訪問して、官吏である自分の家庭に余計な波風が起こるのを、極度に嫌がっていることも分っていた。だから、なかなか母に会う決心がつかなかった。だが、実のところ母のことは気になって仕方がないのだ。それで、お前が母に会って、その様子を知らせてくれれば有難いと思っている」

義経の長い話は終わった。

「それでは、まず志乃を一条家にやって、私が義母に会いたい旨を伝え返事を頂いてくるようにいたしましょう」

「うむ、そうしてくれ」

郷子は、志乃を使いを送り出した後、義経から聞いた一条長成の性格から、常盤御前は、面会を断るのではないかと思っていた。しかし、それは思い過ごしで、志乃が帰って来て言うには、明後日の未の刻（午後二時）に家で待っているという。

その時刻は、長成が役所に出所していて、どうやら留守らしい。

当日、郷子は、志乃と一緒に網代車で六条の堀河館を出ると、一条家に向かった。入浴した日と同じように軽く化粧をして、いくつかの色のうちぎ桂を重ね着して、それに薄絹の唐衣を羽織った。窮屈だったが、義母に会うため精一杯着飾ったのだ。

一条家は貴族だが、摂関家のような華やかさはなく、竹矢来の垣根で囲まれた地味な感じの家だが、周りは丁寧に掃き清められ、庭には、小さいながらも池があって、錦鯉や亀が泳ぎ、その周りには桔梗、ほおずき、クチナシ、なでしこなどの花が綺麗に区分けされて咲いている。夫婦揃って丹精込めて庭づくりをしていることが見て取れた。豊かではないが、好感の持てる堅実な家風を感じさせる家だった。

郷子は、その庭の見える一室に案内された。侍女がお茶と菓子の入った皿を出してくれる。郷子は、千人の美女の中から選ばれたという噂に名高い常盤が、どのような晴れ姿で現われるかと心をときめかして固唾を呑んで待っていた。しかし案に相違して、常盤は、今庭仕事を終えたばかりというような地味な単衣に小袖を羽織って出てくると郷子の前に腰を下ろした。常盤は、四十代半ばのはずである。色白で鼻筋が通りやや面長な瓜実顔に大きな黒い瞳が印象的だ。体は年相応に脂肪がついてふっくらと落ち着いた体型をしている。化粧もせず、黒髪も簡単に束ねてあるだけである。

（美しい人は、特別に飾らなくても美しいのだ）と郷子は思う。

「源九郎判官義経の妻郷子と申します。この度は、御挨拶の機会を与えていただき感謝いたします」

郷子は、頭を下げて丁寧に挨拶する。

「よく来ていただきました。九郎の母、常盤です」

常盤は、郷子を見つめながらそう言うと袖で口元を隠して俯いた。

肩の辺りが震えている。

郷子は、初め、常盤が泣いているものと思った。しかし、どうやら声を押し殺して笑っているらしい。郷子は、とっさに衣裳が乱れているか、何か付いていないかと衣裳を見渡したが、おかしいところはなかった。

（化粧がおかしいのかしら）

でも、家に入る前に志乃に確かめたから、そんなことはないはずだった。

（義母から見ると、私の化粧か衣裳に何かおかしいところがあるのかしら）

郷子は、恥ずかしくなって下を向いた。

（来なければよかった）

常盤は、ようやく笑いが収まると、郷子に向いていった。

「ごめんなさい。あなたの噂を思い出したものだから。つい可笑しくなって」

「私の噂ですか？」

「そうなの。九郎に関する噂なら、どんな些細なことでも知っているの」

「どのような噂でしょうか？」

「あなたが、京について初めて堀河館にいった日のことよ」

郷子は、真っ赤になって俯いた。

(義経さまが、酒席で身振り手振りを加えて、面白可笑しく話した内容がもう都中に知れ渡っているのに違いない)

「九郎は、頼朝さまが自分に一言の相談も無く急遽貴女との婚礼を決めたのを訝っていたらしいの。真意は何処にあるのだろうか。それで、あなたが着いた時に、網代車を調べさせると、弓矢と短刀と木刀が隠してあったので、あなたを問い詰めようと部屋に行ったら、あなたが仰向けになってぐっすりと寝ていたのですって」

常盤は、そこでまた、袖を口に当てて笑いを堪えた。

「それが、まるで亀が甲羅を背にして転がっているのとそっくりだったんですって。ごめんなさいね。私は、聞いたままを話しているの」

常盤は、笑いを堪えきれずにほほほと声を出して笑った。

郷子も、苦笑せざるを得なかった。そして、常盤のいやみのない自然な語り口に自分との間の垣根が取れたように感じた。

「それで、九郎が持っていた棒で、あなたの肩を突くと、突然目を覚まして、裏返しされた亀が両手両足をばたばたさせて起き上がるのと同じように、衣裳の前を乱しながらも、なんとか起き上がると、傍に置いてあった木刀を掴んで九郎に討ちかかったんですって」

常盤は、目を細め顔中を笑顔にしてまたほほほと笑った。

「女にしては、筋がいいほうだったと九郎は褒めていたそうよ。でも、九郎が足をかけたら、顔から畳に突っ込んで怪我をしたんですって」

常盤は、郷子の顔を見つめた。郷子は、手で顔を触ってみた。まだ、傷は完治していない。

(義母は、最初に私の顔の傷を見て笑ったに違いない)

「九郎が、もう諦めただろうと油断していたら、今度は組討を仕掛けてきたので、驚いたそうよ。でも、投げ飛ばして組み敷いて、腹に乗って両腕を押さえつけて、『参ったか』といたら、衣裳がじゃまで負けたような負け惜しみを言うから『裸になってかかってきたらどうだ』とからかったら、怒って九郎に向かって『無礼者、わたしは、九郎の正妻ですよ』と怒鳴ったそうね」

郷子は、恥ずかしくて顔も上げられなかった。

「この話は、もう都では、上は法皇から、下は市井の子供まで知らないものがないほど知れ渡っているわ。あなたは、京に入ったその日のうちに有名人になってしまったのよ」

(都でそんなに評判ならば、遠からず河越にも伝わるに違いない。可奈や女友達や少女達が、腹をかかえて笑うさまが見えるようだ)

それから、常盤は、噂話とは違った調子で考え深げに話しはじめた。

「人の運命など、ある時を境に全く変わってしまうことがあるのよね。

私についていえば、それは十三歳の時だったわ。わたしは、その頃京の都からだいぶ南に下がった宇陀の小村で暮らしていたのだけれど、ある日母の関屋が、わたしを都見物に連れて行ってくれるというの。一度は、都に行ってみたいと思っていたから、大喜びで行った。でも、母の狙いは、当時大評判になっていた近衛天皇の中宮九条院呈子さまの雑仕女選びに応募することだったのね。驚いたけれども、周り中が美しい女性で一杯だったから、(どうせ落ちるわ) と思っていた。都見物できただけで十分満足していたから。

ところが、周りの美しい女性がどんどん減って、とうとう十人になってしまった。それでも、採用されるとは、まったく思っていなかったの。だから、最後の一人に選ばれたと分った時には、とうとう泣いてしまったわ。みんなは、私が嬉しくて泣いていたように思っていたけれど、本当は大変な事になってこの先宮中に召されてどういうことになるのかと途方にくれていただけなのよ。この日を境にして、私の運命は大きく変わってしまったわ」郷子は、義経の正室になることが決まった後の村の騒ぎを思い出した。

(確かに、私の運命も比企尼から義経の正室になることを告げられた日を境に変わってしまった)

「でも、雑仕女になってみて、改めて考えてみたのだけれども、なぜ九条院呈子さまの雑仕女を選ぶのにあのような大げさなことをしたのだろうといまだに不思議なの。だって、宮中の女官といえば聞こえはいいけれど、雑仕女の仕事は、使い走りや雑役をこなすだけの誰でも出来る仕事でしょう。

私が思うには、まず第一に、呈子さまの父親である藤原伊通さまが、自分の娘が中宮になったので、有頂天になってしまって、それを都中に印象づけるために、千人の美女から選ぶといった派手な演出をされたのだと思うわ。次に、私が中宮さまにお仕えして判っただけけれども、中宮さまはとても人見知りなさる方なの。それで、最後に残った十人の中から自分と相性の良さそうな人を選んだような気がする。なぜかというと、中宮さまが『常盤は私が選んだのよ』といていたから。

私は、どちらかというと言えめで、自己主張するたちではないし、言いつけられたことを、ただハイハイと言って、こなすのが性に合っているから、雑仕女にはきつとぴったりだったのだと思うわ」

郷子は、これほど名の売れた女性が、偉ぶらずに、率直に話す態度に好感を持たずにはいられなかった。

「私は、今年でもう四十六歳になるけれど、人生を振り返ってみると、人との付き合いというものは、結局、自分が生まれつき持っていた性格が育った環境の影響を受けながら形成されたその時の性格と相手の人のその時の性格との相性がいいかどうかで決まるのだと思うわ。だから本能的に、この人とは合う、この人とは合わないと瞬時に判るのね。わたしが、こんな話をするのは、あなたとは相性がいいと思うからなの」

「とても光栄に存じます。きっと、義朝さまとも相性がよろしかったのでございましょう」郷子も、嬉しくなって笑顔で応じる。

「そうだと思うわ。宮中で働いていると周りの人はほとんどが貴族だったけれど、貴族はあまり好きになれなかった。貴族の官吏は、雑仕女など、はなから馬鹿にしているから、それが態度にでるのね。私に関心を寄せて愛人になれと言ってきた物好きな年寄りの貴族はいたけれども、妻に欲しいと言ってきた若い貴族は皆無だったわ。

私が十六歳になったときに、義朝が、三十歳で下野守に任じられて、時々宮中に顔を出すようになったの。義朝が来るとすぐに判ったわ。とにかく傍若無人な態度で宮中を歩き回り、静かな宮中に鳴り響くような大きなどら声で遠慮会釈なく話すものだから。そんな義朝に貴族たちが眉をひそめて影で悪口をいっているのだけれども、誰も恐くて直接に注意できないの。義朝が私を見て最初に言った言葉は『あれが千人の美女から選ばれたという常盤か。噂に違わぬ美形じゃな。某は一目見て惚れてしまったぞ』でした。それが嘘でなかったことは、それからというもの義朝が用事も無いのに毎日宮中に上がって、私に付きまとうのよ。私が、雑仕女の仕事をしているときは、不満も言わずに何時までも仕事が終わるのをじっと待っているの。

わたしが仕事を終えて自分の居場所に戻ってくると、もう回りにどのような人がいろうとかまわずに大声で『俺の妻になってくれ』ともうそれ一本やりで口説くのよ。わたしも初めは驚いたけれども、正直悪い気はしなかった。だって、貴族は、わたしを馬鹿にしていたでしょ。それが、平清盛公と並び称される源氏の棟梁である義朝から妻になってくれとひたすら請われるのだから、女として嬉しくなるのは貴女にも判るでしょう。女冥利に尽きるというか。それに、貴族を見返す気もあったのも確かね」

郷子は、そのとおりだと思う。

（男性に惚れられて、請われて嫁に行くほうが、男性の意思もわからないまま一方的に嫁として送り込まれるよりもどれほど女にとって幸せだろうか）

「しかし、妻になってくれと懇請されても、わたしが勝手に女官の仕事を辞める訳にはいかないでしょう。困っていたら、九条院呈子さまから、直接に話があって『義朝殿から、あなたを妻にしたいので女官を解任して欲しいとの要請がありました。聞くところによると、側室としてですが、正室は既に亡くなっていまは独り身ということです。武士ですが悪い話ではないと思いますよ。それに、官吏の間から義朝殿が毎日宮中に来て貴女に付きまとい、大声で口説くので仕事に差し支えて困るとの苦情も沢山届いているのです。ですから、今日付けであなたを解任したいと思います』と一方的に言われました。それで、義朝の側室として、いまあなたが居る六条堀河館に入ったのです。その時、頼朝さまは、六歳でした。見るからに賢そうなお子さんでしたよ。側室に入ったわたしのことをどう思われたか判りませんが、父親には、従順なお子様でしたから、仮に不満があったにしても、何もいわれませんでした」

「義朝さまはどのようなお方だったのでしょうか」



「大きな頭にずんぐりした四角い身体をしていましたよ。目も鼻も口も大きく、腕も足も見るからに太くて力がありそうでした。豪傑肌というのでしょうか、単純な性格で、いつも野太い声で怒鳴っていました。わたしにも、お茶を出せ、酒を持ってこい、遅い早くしろ等いつもえばっていました。しかし、それは周りに人が居る時のこと。二人だけになると『あの時は怒鳴って悪かった』などと言い訳をするのです。いつぞやなど、浮気していることがわかったので、『もう子供を連れて家を出ます』といったら、青くなってあの大きな身体を縮めて謝るのですから可愛いところがありました。それ以来、二人で居る時は、わたしの方がえばっていたのですよ。だから、周りに人が居るときに、がみがみ怒られても、二人だけになったら倍返ししてやるからと気にもなりませんでした。それに、家来を怒鳴りつけても、心が傷つくようなことは言いませんでした。割りとき配りが出来る人でしたね」

(義母は、義朝さまを心から愛していたに違いない。だから、突然の別れが来た時にはどんなに嘆き悲しまれたらうか)

「武士の妻というものは、悲しいものでございますね。私の父などは、母によく申しておりました。『武士は、戦を生業にしているから何時死んでもおかしくない。だから、いつでも覚悟だけはしておいて欲しい』と」

「わたしはね、武士の家の生まれではないから、義朝が死ぬとは夢にも考えていなかったの。こんな岩の塊のような男が死ぬわけがないと。だから、平家との戦いで敗れたときも、尾張国まで逃げ延びて家来の家に身を寄せたと聞いたときは、後で巻き返して必ず帰ってくるものと信じていたわ。それが、信頼を寄せていたその家来に湯殿で殺されたと聞いたときには、呆然として何も考えられなかった。さらに、その家来が、恩賞ほしさに義朝の首を清盛の居る六波羅へ送ってきて、清盛がその首を六条河原の獄門に晒したと知った時には、もう終わりだと半分諦めた。でも、火事場の馬鹿力というのかしら、清盛が、わたし達親子を殺せと命じている事を人伝に聞いたときには、なんとしても子供の命を助けたいと、二人の子の手を取り、九郎を懐に入れて、取るものも取り敢えずに着の身着のまま屋敷を飛び出したわ。その時、今若は七歳、乙若は五歳、九郎は二歳だった。雪の降りしきる凍りつくような寒さの中をとにかく清水寺まで逃げ、観音さまに三人の子の安全を祈願しながら一夜を明かした。もう少しで凍え死ぬところでしたが、観音さまの御慈悲で生き延び、その後苦難の末生まれ故郷の大和国宇陀までどうやらたどり着いて、知り合いの大東寺の和尚に話して、かくまってもらったの。

ところがすぐに、平家が都に住んでいた母の関屋を見つけ出して、六波羅に監禁し、厳しく取り調べているという噂を和尚が聞いてきて教えてくれた。

子供を助けようとして、ここに隠れていたら、母が殺されるかもしれない。

しかし、母を助けようとするれば、子供が殺されるかもしれない。私は、死ぬほど悩んだわ。親と子供のどちらかの死を選ぶかなどという決断はできないのよ。

でも、すぐその後で、頼朝さまが平家に捕まったけれども、清盛の継母池禅尼が頼朝が早

世したわが子平家盛に似ているからと助命嘆願したことで伊豆の蛭が小島へ流されただけで、命は助かったという噂を聞いて、必死に嘆願すれば、もしかしたら私は殺されても母と子供の命は助けられるかもしれないと希望が湧いた。

それでまた、子供の手を引いて都に戻り、最初に九条院呈子さまに会いに行ったの。なにか力になってくれるかもしれないと思って。呈子さまは、大変同情して親切にしてくれたわ。でも、すぐに清盛が聞きつけて、私たちを引き渡せと談判してきた。もうこの時には、近衛天皇の中宮である九条院よりも、平家の方が力が上だったので、引渡しを拒めなかったのね。六波羅に連れて行かれる前に、呈子さまは、これを着ていきなさいとご自分の豪華な衣裳を着せてくれたわ。恐らく、今生の別れの餞別としていただいたのだと思う。

でも、もともと母を助けるために都に来たのだから、六波羅に行くことには、後悔はなかった。

大広間の中ほどに、私が座らされ、その後に今若、乙若が畏まっていたけれど、まだ二歳の牛若は、私の周りをヨチヨチと歩き回っていた。大広間には、驚くほど沢山の侍がいて、わたし達を取り囲んでいた。女一人に幼子三人の取調べに、なぜこれほど多くの侍がいるのだろうと不思議に思った。

でも、私の前に居る取調役の武士の背後の一段高いところに、墨染めの法衣を纏った坊主頭の威圧的だが見るからに好色そうな人物を見つけて、これは清盛がいるからに違いないと気がついたわ。

取調役の武士が訊いたわ。

『何処に隠れていたのだ』

『その方のご迷惑になるので申し上げられません。ですから、自ら都に戻ってまいりました』

『何ゆえ戻ってきたのか』

『母が捕らえられて、厳しく取り調べられていると聞きましたので。母には、責められるいわれは全くありません。わたしのために、つらい思いをさせることは、自分の身を切られるよりつろうございます』

『そのために、お主の命がなくなってもか』

『母の命が助かるのならば、わたしは死んでも思い残す事はございません』

そこまで言うと、本当に悲しくなって、もうとどめもなく涙があふれだして、その場にうつ伏してしまった。もう苦しくて呼吸も出来ないくらいでした。

すると、いままでヨチヨチとわたしの周りを歩いていた牛若が、わたしの体の上に覆い被さって、泣き始めました。

『子供達も死ぬ事になるが、それでいいのだな』

取調役の武士が意地悪く言います。

わたしは、もう身悶えしながら、一層大きな声で泣き出しました。なぜ、そんな問いに返事が出来るのでしょうか。すると、今若が言う言葉が聞こえました。

『母が殺されるのであれば、わたし達も一緒に死にます』

『母というのは、それほどまでに大切なものか』

『母のためであれば喜んで死にまする』

乙若がいうので、四人で抱き合って泣きました。わたしは、泣きながらなんだか幸せな気持ちになってきました。わたしが殺されても、子供達と一緒に死んでくれるならば、これ以上望む事はないと思ったのです。

しばらくすると、取調役の武士が言いました。

『もういい。母の関屋はすぐに帰してつかわす』

母が助かった。これでもう死んでも思い残す事はない。

『有難うございます。有難うございます。これで、心置きなく死ぬ事が出来まする』

すると、取調役の武士が一つ咳払いをすと思ってもみなかったことをいい始めました。

『では、沙汰を申す。清盛公のご慈悲により、嫡男の今若は醍醐寺にいれ僧侶となる。次男の乙若は比叡山預かりとし、適齢になり次第僧侶となる。常盤は、牛若がまだ乳飲み子であるから、手元に置き、追って最後の沙汰が決まるまで一時預かりの身とする』

わたしは、自分の耳が信じられませんでした。

(ああ、子供が助かった) 安堵感が身体の隅々まで広がりました。

『有難うございます。清盛さまの深いご慈悲に感謝いたします』

そう言うのが、精一杯でまた泣き出してしまいました。

その後、わたしと九郎は、六波羅の近くの一軒家に入れられました。見張りの侍と家事をする下婢が一緒でした。

数日後の夕刻、驚いた事に清盛自らが連れてきた数人の従者を家の外に残したまま家の中に一人で入って来たのです。見張りの侍も下婢も外に出され、家の中は、清盛とわたしと九郎の三人だけです。

清盛は、わたしの前に座ると、しげしげとわたしの顔を見ます。あまり、見つめるので恥ずかしくなって俯いてしまいました。

『そなたは幾つになる』と訊くので

『はい、二十三歳になりまする』と答えました。

『そなたに最後の沙汰を言い渡すために参った』

清盛は言いました。

『これなる牛若は、上の兄二人よりも眉間の肉付きがよく、眉は一文字で綺麗に整い、鼻筋が通り、黒目が輝いていて眼力があり、口は締まり顎が張って意志の強そうな相をしておる。大きくなったら、平家に反抗して深刻な危害をもたらすかも知れぬ。今のうちに、処分しておいた方が良くかも知れぬな』

それを聞くと、わたしは恐ろしくなって、九郎をしっかりと抱きしめて震えだしました。先の時は、母を助けたい一心で勇気を奮い立たせましたが、一旦命が助かった後では、もうそのような勇気は出てこないのです。

『ご慈悲を・・・お許くださいませ』

もう、その後は泣き伏して『お許ください』と必死に叫ぶばかりでした。

清盛は、しばらくわたしがむせび泣くのを見ていましたが、

『全ては、お前の心次第じゃ』と言って、わたしの手を取ると傍に引き寄せました。

もうわたしは清盛のなすがままになるより仕方ありませんでした。

清盛が、心の中でにたりと笑うのが、取られた手を通じて伝わってきましたよ。

あの狸親父は、してやったりと思ったことでしょう」

（義母の美貌と色香に、清盛も抗しきれなかったのだろう。もし、義母が、それほど美しくなければ、義経さまの命は、すでに無かったに違いない）

「いま思い返してみると、清盛の言った事は正しかったわね。九郎は、立派に成長して、一の谷の戦いで平家を破ったのだから」

「そうだとすれば、義母さまの美貌が義経さまをお救いし、平家を破ったともいえますわね」

「さあそれはどうかしら、清盛は、わたしを辱める事で、憎い義朝に復讐した気でいたのではないかしら。だから、わたしが姫を生むとすぐに取り上げ、わたしを一条長成に嫁がせたのよ」

「いまは、お幸せそうに見えますが？」

「雑仕女になったときには、貴族と結婚する事など有り得なかったのに、どういう風の吹き回しか、いまは貴族の妻になっているのよね。もうこれくらいの年になると、情熱的な色恋よりも平凡でも安定した生活ほうが気が休まるし、もう、何時死ぬかわからない武士の妻などこりごり。あら、あなたは武士の妻だったわね。ごめんなさい」

「義経さまは、義母さまにお会いしてもいいものかどうか悩まれているのですが、どうお伝えしたらよろしいでしょうか」

「私はね、九郎のことであればどんな噂話も聞き逃さないの。だから、九郎のことは、全て知っているつもり。八葉車を止めて、御簾の中から、横を馬で通り過ぎる九郎の横顔をじっと見ていたこともある。でも、それで満足しているの。

昔の思い出話は、つらい事ばかりであまり話したくないし、九郎が、わたしと別れてからどれほど苦労したのか聞くのも耐えられないし、九郎もいまはいいけれども、武士はこの先どうなるかわからないし、会えば、心配が増すばかりだと思う。

九郎もそれがわかっているから、いままで会いに来なかったのでしょう。

わたしも、それが良いと思う。ただ、ひたすら陰で九郎の安全を観音さまに祈っていますと伝えてください」

「判りました。義経さまには、義母さまが如何に身を案ぜられ、ご心配されているかお話しします」

帰りの網代車の中で志乃が訊いた。

「常盤さまは、どのような方でしたか」

「義経さまを心から愛し、心配されているのが良く判ったわ。義経さまは、義母さまが清盛のいいなりになったことで、許せないところがあるのかもしれないけれども、義母さまは、ただひたすら義経さまの命を助けたかったのよ。義経さまは、義母さまに感謝すべきだと思うわ。

ところで、義朝さまが、平治の乱で敗走して、尾張国の家来の家で落延びたのはいいけれど、その家来が義朝さまを入浴させ、気を許したところで、首を切って、平家に送ったのですって。頼朝さまが、家人の誰も信用しないのは、きっと父親のこのような不幸を肝に銘じているからではないかしら」

「確かに、信頼していた家来に裏切られたら、疑心暗鬼になるのも無理ないことかもしれません」

郷子が、堀河館に帰ってくると、義経がそれを待ちかねていたかのように部屋に顔を出した。

「母上はどう申していた。会いたいと言ったか？」

「義母さまは、都でのあなたさまのことは全て知っているし、八葉車から密かにお姿を見ていたこともあったそうでございます。毎日、あなたさまの身の安全を観音さまにお祈りしていますと。でも、会えばお互いにつらいだけだから会わない方が良いと申されました」

「そうか」

義経は、一言そういうと肩を落として部屋から出て行った。